
未完成

藤崎和希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未完成

【Nコード】

N2017B

【作者名】

藤崎和希

【あらすじ】

毎日平凡でちょっと退屈そんな日常僕等の日常平凡な僕等の日常がある日いきなり崩壊した。男子中学生・周防弥彼の日常は、ある切り離された小さな離島で存在していた。いきなりの爆撃・自衛隊・学園側の裏計画。抗えない運命に、少年少女は呑み込まれる。僕等は何時だって叫んで喉が引き裂かれる程に。

CHAPTER 1【小さな世界】（前書き）

十代の少年少女の苦悩や葛藤を書いています。

もし、いきなり戦争に巻き込まれたら？

闘う理由があったら？

それを、成す力があつたら　。

CHAPTER 1【小さな世界】

僕等はこの島で大人になっていく。

生きたいと叫びながら

傷つけ合って生きていく。

15歳・夏

CHAPTER 1【小さな世界】

空が蒼かったら

何時間も仰ぎ見る

薫る草木の咽びに

目眩を感じる

そんな日常

平凡な僕等の日常

某市立中学校

4

「何やってんの、弥くん」
突然かけられた言葉に、俺は少しキョトンとする。

此処は、何の変哲もない、何処にでもある田舎の中学校。

少し珍しいと言ったら、在設場所が離島と言う事と、全校生徒が5人だと言う事だろう。

何、少し所じゃないって？まあ気にすんなよ、小せえ事にこだわってちゃデカくなねえぜ。俺は昔から細かい事は気にしない質何だ。世の中はこういう奴を、無気力人間と言うらしい。

ま、そんな事は流すに越した事はない。

今みたいに、トイレの水と一緒にサヨナラだ。

「何してんの？って小便つちゃけど」

水を流す片手間に軽く返す。

その行動は些か彼の意にそぐわなかったと見える。

彼、同級生・横峰 翔一は、少し呆れた様な顔をすると言った。

「HRの後、写真撮影だって聞いてなかったの？もう皆待ってるから、早く来なよ」

そう言つとトイレのドアは閉まった。

少しの溜め息を残して。

分かってないな、俺は急ぐのは嫌い何だよ。何か人生急いでるみたいじゃね？

それも時と場合である。実際、彼のマイペースには皆が参っていた。

そう彼は明らかに自己中心的な自分論を心の中でぶち上げ、全く急ぐ気配等見せずに、明らかにダルそうに頭を掻き、のさのさと歩き出した。

「やあ皆、遅くなってすまない。実はさっき其処でお年寄りを…
はい嘘ッッ！！」

春に吹く風ね様に爽やかな笑顔を貼り付けた彼に、後輩2人の手癖しいツツコミが冴え渡った。彼の明らかに嘘な言い訳は、後輩2人には今更通用等する筈がない。

「毎度毎度、懲りないよね！弥くん」

そう口を尖らせるのは、2年・上田 庸介である。彼は中2にして

はかなり小柄な身長に、かなりの童顔。それで目一杯頑張ってるんだぞ”と主張している。怖いと言うより可愛い。寧ろ頭を撫でたい位だ。無理な努力はしない事だと常々思う。

「ホントったい！仲間とは信じ合ってるその仲間ですよ！！」
俺は、見ている人が軽くム力つく様な三文芝居をする。乙女ポーズで言った俺に、周りの学友は軽くどころか、明らかに青筋を立てていた。

俺の乙女ポーズはそんなに不愉快ですか。ああそうですかコノヤロ
い。
気紛らわしに庸介の低い位置の頭をワシワシと撫でる。と言っても自分も3センチしか変わらないチビである…いや、俺は認めてないけどね？
それを再確認し、”はは…”と乾いた笑いが飛び出した。

「大体、校内に年寄りか居る訳ないっしょ！ねえ、郁恵ちゃん」
まだ少し幼さ残る女の子の声に顔を上げる。元気に文句を言うのは、少し団子っ鼻の1年・中原 恵だ。
その隣で、可愛い顔をした女の子が頷く。

「しかも毎回言ってるじゃない？その言い訳。ボキヤブラリー少なすぎ」
ボキヤ…？よく舌かまないね、それ。意味は分らんが、何か馬鹿

にされた気がする。絶対馬鹿にしたろ。分かるよ弥さん、敏感肌だから。

今これ読んでる奴も馬鹿だと思ってるだろチクショー。

この少し言葉の辛辣な可愛い女の子は、同級生・佐野 郁恵。

可愛い顔には棘がありますよ、皆さん。俺のガラスハートは粉々ですよ、ええ。

けども、実際話せば頭の回転の早いい子だ。しかも完璧な天然だったりする。

この前も、カタツムリは英語でマダガスカルだっって言いつつた。それどこぞの国ですから、郁恵さん。そう突っ込んだら、じゃあそこが生産国だ、って。言い切っちゃったもんよこの子。素晴らしい天然さ。

「やっと全員揃いましたね！撮りますよ、並びなさい」

チャキチャキ現れた先生は、既にカメラ位置にスタンバイOK。

”何これ明らかに俺のせいみたいじゃん？”て呟いたら”お前のせいでから”と後輩2人に突っ込まれた。

マジでか。

5人全員が一塊に集まる。

俺は3年だから一番前。決してチビだからじゃない。

何？同級生の2人は後ろにいるって？心の目で見てみ？多分それ老眼だから。弥さん眼科進めちゃうよ。

隣に庸介ちゃん。

後ろには、郁、メグ、翔一。

空は見渡す限りの蒼窮。

眩しさに目を細めた。

全員が肩を組んで

ハイ・チーズ

軽いシャッター音と

はちきれ程の笑顔。

最後の。

「ねえ、あの後撮った個人写真、何に使ったる？」

放課後の3年教室に、郁の言葉が響いた。

「アルバムか何かじゃない？」

本のページを捲り、興味なさげに翔一が返した。

「え？でも僕達も撮られたよ」

と、俺とキャッチボールをしたがら庸介ちゃんが言った。それにメグも頷く。俺も激しく同意だ。

「確かにおかしいとつて。皆も見ただる？後ろの壁にタツパ計るメモリが印刷してありよったけん」

俺は手の中でボールを弄びながら、一番怪訝に思っていた事が口から出た。

アルバムの写真にしちゃ趣味が悪すぎる。

俺の言葉に皆が深刻な顔で黙り込んだ。

ぶつちやけ俺は、今みたいな雰囲気は嫌い何だが、流石に明るい空気は流れない。だって、明らかにおかしいだろ。

全員が全員、何か考えているのか、教室の中は酷く静かだ。

沈みかけた太陽が、オレンジ色に染まって、校庭に影を伸ばしていた。

それを見詰め、一度静かに目を閉じた。

俺達は全員、この島が地元ではない。

所謂、難有りのぶち込まれる中学校で、親や親戚は厄介払いが出来、尚且つ多額の金も手に入るらしい。何て美味しい話何だろうね、アイツらにはだけど。

その結果、俺は方言が違うし、他の皆も訛りはバラバラだったりする。
しかしいくら難有りと言っても、あれじゃまるで囚人扱いだ。刑務所ならまだしも、生徒に対してあれは酷いんじゃないだろうか。

室内はまだ静だった。

誰もが言葉を発するのを躊躇っているのだろう。

「まっ、考えても分からんかろーもん。やめようや」
俺のユルい言葉に全員がホツとした様に頷いた。

また、楽しい喧騒が始まる筈だった。

平凡で少し退屈

切り離された離島

家族はいないけど仲間がいる

そんな

僕等の日常

愛してやまない

僕等の日常

だった。

この瞬間までは

ドッゴオオオオオンッ！！！

瞬間、凄まじい爆音と地鳴り

「うわあああああッ！！？」

「きゃあああああ！！！」

皆の耳を裂く様な叫び声

まだ微かに揺れる校舎の床に、転がる俺達。

頭を打ったのか、耳の奥でキィイイインと音がする。

クラクラする頭に軽く手を当てて起き上がると、転がったボールを拾った。

おかしな事に気付いてしまった。耳の奥の音は止む気配はない。寧ろ、それどころか増えて、オマケに近付いている気さえする。人間って凄い。嫌な予感に体が勝手に動き出す。

反射的に飛び出した体は、少し歪んだ窓枠に体重をかけ、パラパラとコンクリートの小さな破片を降らせた。

広がる眼前には、平凡な見慣れた田舎風景

等無かった。

少し崩れた家々に

澄み渡った蒼窮に走る

「……………戦…闘…機…?」

俺の咳きに

「な…に…これ」

啞然とした郁の声

「何だよ…あれ…」

力ない庸介ちゃん

俺にも余裕がないんだから。

それは、皆が動き出そうとしたと同時にだった。

ピンポンパンポーン…

突然の放送音に、動作を止め、意味もないのにスピーカーを見た。

《諸君、今から出す命令を洩らさぬ様、よく聞け》

流れる音声は、酷く無機質で

《たった今、我等の住むこの島は攻撃の最中にある。
よって、第一級戦闘発令。

君達に　　》

誰もが望まぬ

《　　出撃してもらおう》

言葉だった。

「何…何やそれ…っ！！意味分からんけん！！」

絞り出した抗議の言葉

「君達に拒否権等存在しない」

切れた放送

「…何…なの…！？」

雪崩れ込む自衛隊

「やだ！？離してえ！！」

腕を強い力で掴まれ、メグが悲鳴に近い声を上げた。

「抵抗するな」

ガッツ！！

ソイツは、メグを機関銃の様な厳つい銃で渾身の力で殴った。

鈍い音を発してメグは床を滑り、郁の足元に雪崩れ込んだ。

「きゃああ！？メグッ！！」

郁は悲鳴を上げ、メグを慌てて抱き起こした。無理矢理女の子2人を掴む、自衛隊の奴らに、

「止めるよ！！」

止める間もなく庸介ちゃんが掴みかかった。

バキィッ！！

頬骨が軋む音がした。体格のいい大人に殴りつけられ、小柄な庸介

ちゃんは少し吹っ飛び転がった。

「庸介ちゃん！！大丈夫か！？」

俺の呼びかけに、顔をしかめて頷いた。左頬骨の上が赤紫に腫れ上がっていた。

メグは鼻が折れたんじゃないかって程、鼻血を流してる。

唇を噛んだ

直ぐに口内は鉄の味に支配された。

「全員、配置に着かせる」

言葉は嫌に耳の奥にこびり付いた。

CHAPTER 1 【小さな世界Fin】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2017b/>

未完成

2010年10月12日18時55分発行